

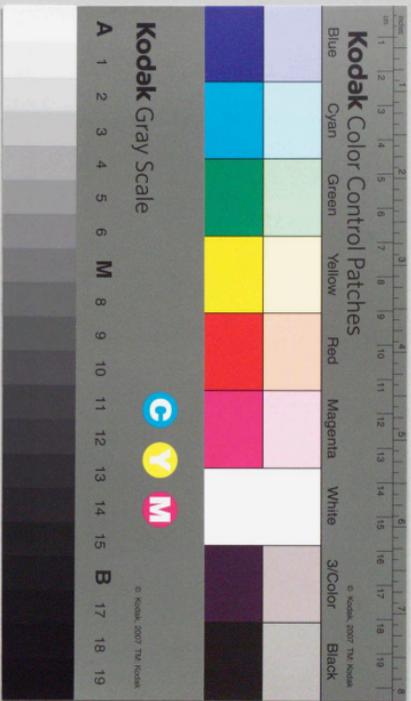
稽德編

一

共發檢書冊

年	月	日	冊
冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊
冊	冊	冊	冊

280
7
1A-1-2



書 縣 慶 州

東照宮 第一

德編卷之一

慶州府在城の時江戸

將軍極大田

借小知り五百石は下也と御折紙と 御前

なけすてお立ち候 將軍極以外沙怒

は持世者と成敷一は 佐月との 上意より御

変小井上主計次正就取り 世者

大君極御懸の者小沙座百一旦沙辱は成

一就守格なりと 中上若れと 然らば女駿看の事

明治十九年
八月 點 查 音 打

83.7.00 36250

A 260
7
A-1-B

世の中上りとの上意を則ち計は駿河へ
来る趣して、台徳云、何れかの儀もなす

駿河極の中上り人を歩いきとありと歩か

ふ成り主計は新中上りお主計は駿河へ

あり、大君極、御目見の中上り人を江戸整家

事、八重とて、御身は成り御主計は落して

上り、江戸利業、御身は今夜私と歩上せ

は成り、先日大田何事不知り、六百石より、八割の

いしくと中上り附、大君極、御身の御機嫌

才、お、松平の徳昌、自由度事り、なす、意外ハ

彼者、いふ、あゝ、民吏ハ、將軍のいそぎ、いそぎ

いそぎ、あれ子細ハ、將軍ハ、天下に、主り、世ハ、太

平より、位ハ、三台、それ、何程、高上り、夜、大田

いそぎの者、いそぎハ、今夜の、意外、十分、一の、いそぎ

いそぎ、何れ、罪ハ、いそぎハ、いそぎ、天下の、者、誰ハ

非義とて、中上り、然、受ハ、彼ハ、賜ハ、祈の、知、彼ハ

功ハ、あゝ、いそぎ、いそぎ、我ハ、て、尊ハ、あ、汝ハ、是、いそぎ

是、我ハ、いそぎ、事、減ハ、將軍の、天下の、政、いそぎ、と

とも世茂某の者なり武拾間程並きまき
方ゆゑ之を繋ぎけ長刀ふけんとせし
久前是と云て己の刀振指を六間程踏み
なけすて我ふ向ひ大の眼とまると見えま
けし思ふなり 沖大將名魚島の人問をな
ふ他法何ふも此を來りて少くハ申して下
の空にハ威中百發とて却て某ふ惡口せし
時実むと思ひけり 扱ふ長刀と捨て某ふ
入り能く彼の心中我思ひまふを此走りの者

一人田場少て吾と取て一人ハ城の堀を網
とらむ毎人と追はるる事一は是といふ事
つとむ 程と料理しつとなれを少くも意外
少てす 偏ふ我をとも者きての事なると
思ふ 彼走りの者毎人ともを云ふ出久と
智の則之と節と叫ゆ 海り志満足なりといへ
る久三節涙と流し扱ふありつとむ 押去る
し度ふ恭平のせよとゆり切そのふす上候ふ
之とも今礼國を此をなれぬ中へ今礼世

少て私にまじりて其の侍も少くなりとも
常軌ふ沙汰なりし事とて其れ世をりふ
習く私之感と云ひ氣随少てハ其れをりふ
つき一入彼者の忠ん其感一秘我ふ思ひ
なり昔と今も諸侍の忠んは只大將の心ふ
ありて依故事と武道不業肉の者ハ半分
固てハ世者武功ふるるやうふなりハす
とのとんと云めて固之忠ん者なりてハ
思ひ切らるハいふぬとの之主は其れなり

とのとらる氣ふ合する沙汰ト事は軍陣
少て大敵の中へけ入よりハ大敵なり子細
大敵の中へ走まへくハ大利を得る多し
主人ふあを思ひ進てハふふより身命妻子
よそもの通つて事あり是と知りなると
其禍と入りて思ひ切てハ大到大忠
のとのと熱して國我治め天下のまると者ハ
漏れの内ふ度一燒る家の下ふ即ち心根と
忘るは諸人の心さう成甲考へてハ何の

やしも多き事なりとも思ひ切ていざり
我由きて控てぬよあそ何れも主事の用ふ
まきよ主事のむらりなりぬとも主事ハ
忠臣なり又彼ホトよきの様子を才体の者哉
羽武者と不融堂ハ國家ハ一ツの鳥の上し
鳥の心は大將より羽中 是を侍大將とし
風切セ羽尾の羽と諸侍少くして是を羽武
者と云ふ世相ハ多別なりては世相より
海軍と第一と兵船とく小左田トよきの者ハ

只実義ありて流の下知と能國と海軍は第一と
まきよ鳥と羽中 是はは動靜ありてくふ
侍大將是程の大將なりハ亦なけ一偏そハ威
くくくそ 叔口とと家老少くして是ハ羽羽
大事の役なり 其外の毛ハ百艘鐵人町人悲
して一切の國民少なきへくそ鳥の心は
まふ飛鳥となきなりとし大將内ふ者依怙
貝負なく我の心とし普政と行くとまこれ
士農工商志と一ツ少して主人のよあ者命と

日本とうゝひ又吳國を平して武造と云
ふは對ハ韃靼日本と云ふも大唐とうゝふ
そ彼秀吉朝鮮に軍も是より如也と日本
の武造は仁孝一なり少と云て大と積也二人
六具と云ぬ大小と云く長卷と云ふは少不
只獨り即よりとも人間ハ謂ふ及ぶは去魔鬼神
と云ふそれと云ふそ有るも又大軍多留也
武の心然志是武勇の備へ是れも忘るふ
と云ふそ云と云て武威のたよりと云く

これ武道の本意哉知る者ハ必中國のさきり
と云ふそ 武家の大寶とハ武居そ 抑和漢不
古今不易の大寶あり先日本の大寶と三種の
神器と云ふ三種ハ神器寶劍内侍所之神器
とは神の印と云ふ理ハ西遊寶劍材雲の
劍と云ふ理ハ慈悲内侍所ハ漢と云ふ理ハ
智慧世三種の神徳ハ万事の根元そ慈悲
悲と智慧と西遊とと三種の六字と云ふ是
慈悲と弟の根元と云 慈悲より出る西遊

誠の正を意慾なき正は刻薄を以て
不正を又意慾有りする智恵ハ誠の智恵
そ意慾なき智恵ハ邪智有り漢ハ世大賢と
智仁勇の三徳と云位在大神の託宣ハ我ハ
神神命一意慾を以て神作ると我ハ神力
アリ正を以て神力と云我ハ神通アリ
智恵を以て神通と云我ハ奇特アリ
是ハ奇特と云我ハ方便アリ
是ハ方便と云是ハ是也そ意慾なくも言理非道を白

事を行はれ凡愛違ハ我ハの私欲有り出で
天下の礼は君と家老の奢有り出でそ人
民の安堵ハ憂有りして君家戚と徳勤ハ
あり天下太平治世長久ハ有り人の意慾ハ
ありそ意慾ハ仁の道之奢と云りて仁と方
の根元と定の天下と治の終と云

御遺訓
下同

一
又上意ハ汝と云聞け世一才の厚理と伸ハ
天地ハ満り天地の厚理と云はる一才の

肉ふかたくなり世の持病より命の長短
の善悪啓りあり長命善道と好む者苦
薬との世を病なれども谷と一心と我も不
持る時長命安樂なり天下王家と治るも
又か秋河も我も不さくして威威僻
予し君もつる者我家人とつる者共
是主人少くも是所我少人我も不思
法と世の時先と後を能つる時を悟る
眼前の飯なり尤もなり王家の政道も我も

さうして世に居しもの世に廣く天下と一
身もちあ又小き一身と天下小廣く政道と
なりまるとさくさくも天下ハ將軍の五官と
心はらへし五官と六耳目鼻口手足なり
此の世は此の友人なり心ハ主君なり目を
足多事と心不告け耳を聞くと心不告け鼻
を香と心不告け舌は味と心不告け舌は熱
身は寒暑痛痒と心不告之五官皆皆皆
事と心不告け心は時心是と讀けて

是非とさうりて夫々の下初段はすしとなくふ
主人を人のほふも所と見ずて是とつひ若
忠於心とてして政道とてををの君臣操と
いふは又下人の主人より我不治の操候と
いひ候も是も有体ならずてほふる者不調也
又我治る事ありて我より治る事勸むを
忠信といふを凡主人治るれば利後とて
我を治るの事とほふる扱ふは有り主とて
らすは不忠の事候なりむ主人を愚とされん

目鼻一筋ふあれども目れ口は鼻知らず鼻の
も目知らず是はうそ万事と考へん人
とかくのしる事也

一 我の事考へんは我の爲め事人の
爲めありそ人れ家の柔弱世を多とて
誰は是れ侮らざるん我家柔弱を多とてハ
人又我を誠あるとて知りて所とて
人れ心不被る人の好む事者と好む人よく
むりしきものと悪む人悪む事者と

今日ある者の其の智恵を世にふまは汝は信儀
と大花と三人と心安く仕りし中も一人汝と
心安く仕りしと云えり相ふ右の生れ布衣
事を思ひしより啓八因事言り時三夜々三夜
とふ汝ふ云付けりしと一夜ハ信儀一夜ハ
大花一夜ハ汝調り是と二世と計りの言云誠の
志信と云をこれと今川義元ハ臨海寺の雪
山禱只一人とお供するの仕をりし國は
世事なれとも家老の威なり一雪山死去の後

義元の仕をは本の如くなれとも諸人疑ひと
りし義元の智恵と云くなりて今川家終不
滅せしなり其の能者少くも一人小任は右
何は弟人の懐く身もまて何の備え
も方他人の昔も今も希まれも一事もなれ
とも一方小悪友事有との相ふ一人権と
可て善事と行ふ付と事と違て邪私少多く
なりて少く能政り出ても諸人はを信せん
疑ひ恨むは汝が小主人の威恒くなりて今

の心をくわたり終ふ天下國家の滅亡の端ト
なりて是を相の心をくわし汝も世にたり
若一人を威とありて將軍の爲す汝も能
敵そ子細く先一人を威とありて其
家より治る事ありよてもそ者百年の跡
に家のあつても相を又已欲心深くして
主君の氣不入也を類ふ威と據ひ着る者あり
兎角着る者ハ其家の治敵天下の災となる
よのそ誠不忠信治る者ハ能き智恵也不

の是を其智恵と仲す不讓て天下の家老ハ
其智恵と天下不唐の一國の臣は一也不唐の
ゆえ能く世心と全然治し人とするわけ仕ハ
さやう不折ふ心を月一一人不威と方は
はるハ主人の誤りなり切又忠信治るとのハ
たゞハ主人愚ふして己の權柄とありとも
彼の生死の定まると考へ一人ハ
又万事ハそのくの原なれく切あり者も尋
問き或は治合すし愚をも一不賢き

常少降り初のしこくは武道に備へあり
はんとてゆく下賤の者又ハ愚人よりとて違ふ
はるもの小其事を可為諸人のしりて控そ
そりての道不達する人と可なり終一節
辱し然中武及空業内より家ハ諸士の風俗
素約非義ふりりて武骨をなれそ一戦小打
まく依時ハ罪なき嬰兒までと一時小なりひ
ぬハ古今のあしきし武家ふせとて武道ふ
愚なりハ嵐とて言猶乃しと公家と武家との

整りハ禮を令まうそ公家ハ令浪のしこし
武家は浪不同 粗糸ハ人氏令浪と好し浪
の大寶より事を知りて其政ハ浪ハ寶器此
本より五穀と能き竹木と切り朝夕の食と
とのハ尤天下國家此礼と拂ひ太平と為り
浪の用多し 浪ハ大寶の長とてとの之と
あん月とてとる令浪との好みぬとて災の
嫌とてとて武家武ふとより公家風ふとれそ
刀服指と代替令浪と中原入とて浪腸片と

性未して命と共不同一 只若家藏とよく勤
むる者と奉て奉と飽ち慈悲と万の如として
天下と治の終ととへし

一
又上意と將軍少佐へ武家の流とくむ者武道と
志とよむ肝要の道と子細ハ出家よく佛法と
執行をせしと大山大寺の住持となる向そ聖六
先任の弟獨なりとも 聖学の僧尼大寺の住
持と成りくく若一見復まそつる向そ却て
其の如とつるよあそ 如く不國主として玉と

治と道と教と臣諸侍も情なく 民と若くゆめ
なる家老をせし 民の志とくむと可そ教と綱め
之と調と善政道と一致まうまれも諸事とも
詞と所とも似ひ相違し見と違くと傳ふ成りて
若し忠信をそ心底の志と立とて意わとの
可と可と可と可と却て不患者とつるよあそ
可の可は法人を主君と疑ひ主と人
と疑ひ主の心安堵なり 是武道の本意を可
と可と可と可と可と可と可と可と可と可と

置きやうなく 主は家と信し 家ハ主
君と少しも 疑ハたして 之ハ心ハくき世の
中とむきと 疑ハくハくも 禍ハなき 故ハ古今
二軍の争ハ 概疑ヨリ 起るといハりされし
天下國家のまゝして 我身ハ 啓自家来り主
人と疑ハくハく 不信とて 是ハ思ハくハく 武
家の布意と 知ハくハく 之ハ 旗ハハハ 宗及ハハ
天下の諸人 疑ハくハく 不政道 信ハくハく
ヤ 辱シ 殺スハハ 誠ハハハ

一 大厦千間夜卧 八尺良田萬頃 百畝 日小食不
事二升とて 千尋爰 万尋爰の家と 扱ても
卧所疊 一尋あり 又 前ハ八尋と 後ハ八尋と
とも 食ハくハく 是ハハハ 二三粒ハハハ 天
下のまゝも 治ハくハく 唯一飯ヨリ 外ハ用
キハ 飯ハ何ハハ 民と 若ハハハ 是ハハハ 是ハハハ
榮耀と 好ハハ 金銀と 蓄ハハ 不啓自家ハ 思ハ
ハハ 是ハハ 不ハハ 思ハハ 次ハハ 是ハハ 中ハ
ハハ 是ハハ 是ハハ 大宗 我股と 是ハハ 我膝ハ

とのそ誠ふまゝ忠信の者ハ大者言位ハ威權
主れ忠と深く思ひ大小上下と名々す令
對する和らふて慈悲深く位より名とも
詞と引け溫和きを誠の忠信といふを壁
へハ松根入深き根常盤の色千年と云ふを
木小かき藤ハ根入かたうそのひより己の根
入りハ考之て後ハ松と目下小見たり必朽と
老くし藤といふ不枯るものより傍々老は
朽ふかき藤のこゝろ王家の安老といひ

これ我知分の後きとも辨へま鼻の先向
才智少て己の利とをまゝとさうじ傍々
と挿の己の欲と第一と種々根の妙法抄
といひ出 必主の家と破るといふ妙法を
古法と破る事なるは愚かなる 我家の政道ハ
法康云 廣忠公此御政道と法け多子の二
夫と以て老功の家老といふ相傳の上を定
重く政道を物と大に替りし秘事もなきふ
まのふすといふを世の屋のこゝろといひ出

家法を乱すべからず一后孫の人を因ひて
將軍の我亦大不存なりきそ之上 法皇公
の家老をも乃末ハ流るの先祖の定めを今
文大小整りし事なき小時の様ふなりて
ありしはゆゑもと之を不思ふ所一老を
思ふるものハ臆ゆけそ子細ハ親の敵と
すそ新人の心を知進時とほりよとて
みと巧みなり 將軍の敵とすも肉と
みそとくつり念を論ふ因ひ給ふし

定く將軍も其覺悟なりと 上意あり
あまてま計以中書ハ 御意北とく万中
定の有り也 佐有公新志 御増増 沙後發来
の依は家老中一安 沙名成 以練はと信
出さ進 御家老中一回の上と新志 沙初増
らわ御發發は 沙後發の極子と為以也
佐後之銀との以 以練は 御家老中一
人 挿の書月とんそと 水野酒井所給
井伊本多 柳原大久保 内宿 甚不 一流との民

と沙甲一は成甲乙をなす存すは伊原も又南
座兵腹合浪の沖廣也は伊原も阿信濃
大苑私三人は沙甲一をなれ沖内陸の上を
は伊原も尤先例の沙甲一の儀と沖廣也
は伊原もと中上者れを又上意ふ今の政
及は我先程りの沖政道をいふ三別一
國をふくむる時も今又天下此事と存すは
てもそ大小心啓進ともそ基を一政をとし
世政及と改めんとしあとのあつを礼長なりと

初より一は成甲乙をなす存すは伊原も又南
座兵腹合浪の沖廣也は伊原も阿信濃
大苑私三人は沙甲一をなれ沖内陸の上を
は伊原も尤先例の沙甲一の儀と沖廣也
は伊原もと中上者れを又上意ふ今の政
及は我先程りの沖政道をいふ三別一
國をふくむる時も今又天下此事と存すは
てもそ大小心啓進ともそ基を一政をとし
世政及と改めんとしあとのあつを礼長なりと

是亦同一先祖の行跡を非ぶるや家と破るや
又是利將軍公方義持父の政を命じりて
引込み思案をそ次丹小家にとりて後少は
公方將軍といふ名をとりておと心のみ
なりきりては諸國大君にも是を恥く彼を恥
むるの道も一も事なりは檀那坊との堂
寺建立の勸進をせりていふは是を爲す
そ相大内義隆上杉憲政今川氏三武田備前
所より皆先祖と非ぶるや家と破る

方と共ひたり又親を一心一義の家元のよし陳
言て用ひるを則親と非ぶるや同一若家
の故ハいふ及をて天下の諸大名先祖の家法
残る家のみ能く善入内院とすきりて
一^や大生有て替り又私欲深くして一寸
先は知る人民を苦しめ民の肉むるを而て全
浪より一親不入屋を爲ふ古法と替りて
て者も成を何れも天下玉家の騒動の如し
の新家衆多時は正一人は古を思て非る

よの玉柄を有るは存続の者全根くく之を
入るとまの爲に思ふよのそ汝よく心作よまの
爲よの六若人と其の挙てまを不周ひまを
人氏とのまを諸氏を諸してまを徳くま
治るやうふまをまを君れまをまを又天下の
志まをまを徳をハふ及まを尤天下の諸大
名まをまを諸の家法と能勤のそ家と能
治の先祖の家法と失まを若先祖家法の
内まを不諸人の若まをまを思案まをま

老功の臣とお徳くま能まを不改まを又忠
厚まを是也まを改まを好く改まを
あまを先祖の功まを不つまを玉部と此まを
まを先祖の位まを我まを小改の新法まをまを
不存のまを徳也人まを親先祖敵まを付
まを是と考まを也まをまを先祖と志まをまを
人の道を武臣を静後世不礼と志まを我
才の奢と断まを慈悲と万の根元まを家法
改勤のそ家と世まを不修まを若人まを忠信

人より私の人を嘗て是し

一 又上意ふ三別少て六月半小城進新(おられん
百姓も田と榎多中小御進こく色白き馬河り
をこく寄てん進こ田の場不榎を三世傳ふ養
父をけし中不刀服指と鎧置置り不審不
思ひ保進寄能くん進こ家人の進者之人と
おろして呼者も進者空閑して返りせは
使の去るもとりく新り也と一 時使の侍の
田の中へ入付進者使れ侍不ハ侍給(も水と

つひとそとそ顔と流ひ大小とさ一 我弟不出る
その弟進者不中聞止るハ相く汝ハ御き是流
及ふ事之我少身もてさく友心解り
わさる知れ可者少て左様水賊き世をさる
是流き事とそ涙と流一 也え進者も因こ
流しり進者ハ榎多の似合さる事もてせき
尤相々の衣服りハ榎多の幽少て武器下人
等身体不備也(武雷不於て高き登進の忠伝
流き者も或時進者不初れと如流一 大賀

少一其も悪かれ之に怨み脚体滅亡はるふなり
ゆきりし海く畏し中々思ひ多し故に思ふなり
は候に會議沙連行方 御南家の一大事也
取らざるに事格々 沙家中の大小も小引方
控の事も中々主君に沙事して 沙家首
長もつて事りとも中々及海をとも主役少て
之度夜に席を倚ち 沙事行方 沙家と
事々の事りとも中々及海をとも主役少て
は候に就と中々 沙家目とも小引方
ハ沙家

悪事大取なりとも中々及海をとも主役少て
其善事ハ左様ふと有と 思ふなり
一そ沙家行方 奢大取なりとも中々 思ふなり
我小なりとも 思ふなり 家内とも中々 思ふなり
の事り沙家行方 奢大取なりとも中々 思ふなり
何にも打寄り度く 思ふなり 決断行方
年を送り中々 思ふなり 御南家
ハ沙家行方 奢大取なりとも中々 思ふなり
思ふなり 思ふなり 思ふなり 思ふなり

結句家老も中々事ハ少くあり申さるやう不
明な所もよく御座り申さる事不却て
沙汰氣と爲りて下詮も事不なれ共今
まで其分考へ置かんと何處もいと拙て中
身不潔前と形重き家内と感ありて不潔
謀叛なき一々膳料不中と云々膳料の返
事有く取別法所と云痛く成敗せし
御座り申さる所も一松子と流不細く不潔ハ
我小栗と句返不目付と云ひつ希量く小何の附

御座り申さる事不目付と云ひつ希量く小何の附
小栗と松の事あり之をハ知りし事也
句返留く御座り申さる中々月何と云ひ月何と云
上中々を定くそ方中沙汰孫言成之松
松子と具不言仕候我之方小聞せし事也
御座り申さる事不目付と云ひつ希量く小何の附
小栗と松の事あり之をハ知りし事也
句返留く御座り申さる中々月何と云ひ月何と云
上中々を定くそ方中沙汰孫言成之松
松子と具不言仕候我之方小聞せし事也
御座り申さる事不目付と云ひつ希量く小何の附
小栗と松の事あり之をハ知りし事也
句返留く御座り申さる中々月何と云ひ月何と云
上中々を定くそ方中沙汰孫言成之松
松子と具不言仕候我之方小聞せし事也

少くもなき事之句故と云ふ身存れは海軍
中今刻存と合せざるやうなり小栗と関門を
うりては海軍の己の所へお入るは志ふは己の
悪くを悪く是く小栗之上はなり 其小栗は
之成る好くは信じて 其小栗と具小中よりハ
抑小栗のくきや有り即刻は成敗は有り
是くよ 抑小栗と云ふ是悪く上りと云ひ
色くは院之中と先関門をせりと云ひと云
是我意と主人小人の訴へたるやあり云々

史記曰事以密成語以泄敗とあり 又易曰機
事不密則害成と云ふ物は何れも其
者の悪事と何某の言て云々とて其者小
云ひすまへ云や是之者も者の才一不つては
所なれは海軍の非と云く小栗の我が告げたり
と海軍前不問と云道なり 然れども海軍前
無智愚の飽きて云々云々云々 我彼不
氣と呑了るは事未だ諸人へ彼の悪と云く
知也と云心小思ひ云々 是と云ふの云々云々

家中悉く海防前小松也海防前小松也
おしりり事なれと相小松忠義少中
世成りくまもえ何と存も從り
とて家老も目も所とわこ何のりもい
彼海防前小松小意熟小松れも己の意
取すまき謀あり^和取て己のりとか
密く批判者あり是も虚言成りけ
横目少月いせり又家老も我も
の不或時我意取ふと出り小松家老も

かき用と云ふ海防前小松といひり海防前小松
取ひしひり海防前中分よりとて海防前
出りり海防前切もさう事とも二三
より家老もいふは鬼前海防前小松との
用とて思ふも海防前小松もを意のこ
出来右の也少成りく之彼と我忠義の訴
今少し違ふ我家老も者と相海防前
奢りて海防前出来て信思ひ家老も
内防せりとも彼者の海防前も小松小言

せも彼をそ祓いてかくハハソと 我不思ふも
事口惜く思ひ只深草と園付ふらり又は
家元の内園取て指透へんと思ふも是又
化園共園元の何より我討ふ家不慮り出来せハ
何れも枝をそく討死下位を實悟と寃め申
さるべし又深草前今根のなりともとんと
今也今根と導きうりしと横目とも我お去_言を
もとも我嘗て馬車上又家元とももももも知り
とせり今根と導き何れも世不導き少と

某の智恵もくるとと家中にありていひと
有りそとや田舎と治る者庄振のつとをきく前
少て國を治る不義せざるも子ふくんとん也
さる我の何そ深草よりとさ者不依信具負す
と名也て國天下と治るも君の嗜むも不慈
慈を改道の揚元とて治るも礼世を忘
れしを家職とて一少と治るも我家の風衰
と計り我らひと治るし家元の苦忠と分
明少申 天下國家の是非と處分治るし

我着時有り物として少くも依佐昆貞を以て
有りて陸分心然然不家老とも小徳し何れも
諸人かか老子細く其功不尚々時其知りと其の
金浪弟穢すか何れかの實をわたりたりとも
誰か是れを之と云や古く帝竟は賊に土民
の争ふ天下と流り給ひたりとも天下の人
是と非とせん末代までも能く信まのて本
小定りそ直に本天下好道たり辰滄水興と云えん
りとも自柄といふ、諸人は是をたりて後其れを

静徳の世もは其備云常と安行ひ其も私
まゝして諸人も流恨にまゝにやう小定りと大の
といふ事不油等能のんは小定りり老と大定
と云、餘りり今天下の家老ともをわら上上
そらとも世上の諸人もまゝにハ二月空の流り
我も、首ハ何れともなり今ん何程なり世も不
家老なりとも諸人も意外、後をいそ科之
といふと想する人ハ本一体のものそ思ふなり
少定りたりとも人とも命とも返さくも思ふの

巾を奢り、ちかく忠信を有る者は何れも上げ用
ひ何程の福をあてゝも諸人むと思ふもあそ
隠しあつた時を有る人抱さうきも凡隠し
給ふも諸人思ひ大持事も私者極ふまゝとの之
様も耐え取者と世者もともふ悪意を注ぐ物
まゝ人の家れ滅亡とて只主人頼み能く成
家老一人少く威と振ひ奢り居るまゝ家の運
の末なりと知らんし

一 又上喜不存ふまゝいづれもよく大智海に下

賤の者なりしを而立家老共の末存ふつゝ福
一 小姓者驕強く家中の諸事以外の外小悪口
分國此不勢家中の役使令根弟後の事と
某為なりとて家中に刺り諸人ごとく争ねり
仕り我の前よりハ沙家中の法人安堵侍り未
存存りて中少我ハ誠と思ひ安堵せりなり
小才成者共、毒忽成りまゝ思ひし法家ふ少
まれ所止滅亡のこゝろにけりていふ違ひ
ゆるく口惜き事と思ひ畢竟ハも前の指を仕

少も増ゆくと思ひ滅と云はれ大身武功乃
者は其不辨一許一垂より越して主人の
態も其者の思ひの家光武功の士横目と
主も果して其の福有りしと証言多し人より
已より智慧有る不心得奢りの餘りぬと然
も主も一々終ふ所を失ひより汝よくん終
りて其の人も人をうり節と思へ諸本も天下
の諸大名末くも其不判も偽りのまゝも其
主も天下の人不笑也將軍は名とり其存

元來人も心不良知と云ふ者有て善惡邪正
を大形を知らぬを然也を誠なき事此は
申しつゝ也思ふのそと心清く云ふ不何れと
吾をいひも心不悪也を惡と知り云ふ不
得り有るも善をれを善と知らぬのそ切も
偽りつゝも事有る也首と云く今と願ふも不
主人偽り活き時をも家と破り助を先不
得る者偽活き時をも家の家と亡し助を失
ふ思へ奢活きとも必欲活き惡利口のうり節

者有り我亦不徒我をしてよほさず人の敬ふべき
誠の道有り己の威勢をつけ人ふやまはばん
ぬふ自ら言ふりて人とあはれり狐虎の威
とやうとく小まご心示着て人を威一己と
中れよき福ひ軽前者の一寸さきを却てを
能名を思ひて主人の若と再々一喜言させ
或ハ諸役人となり己ふそり智恵有るふ
心得家中といふあ諸君君不足おれま
と願ふは是命を君不忠ま小人之能我

才を願ふ我心少く心小異是等も後も不忠も
海道を度も皆こり助飽まで利教有りと思
ふより出るそ忠信といふ我才智不るて
私と有り己の智と有り能く人の善悪邪正
と辨へ知ふ有り也一々主君なる者家中の
士と忠し政道不依信具貞まて立てて民百
姓所人等ともめみ下れいふ不忠ありと云り
法人のぬむ所といふ人思ひ有て天下太平之
是と返して大所を樂し小所末く悲しん恨

とむりこころのつる人散りうせ必家老者
そ賤き人氏なりとそ本原あはそ賤むらう
そ考者堯一鎗前伏見の我屋敷(我領分
の者少家山伏職人町人巡礼小針一百姓まで
沈束もなほ常この位並れは格そ汝等も役
少そ若人の埋まそ悪人佞人のゆと目とら
うらやう小むらり弟一忠告之されそ孔子の詞も
人のこと不知とうれさ進人と不知と憂ふ
と宣へり人と知ふは智魚なり人と知んばせハ

我心の依怙具眞の私とちて人の心慮の若
思よく善とせし言とらち小迷ふ應くそ
又古語ふ人詞を以て試之今は火を以て試む
とまひりされそ又言ふと心とお遠くそ口小ハ
右言ととも心ハちみよそ右あり能くつまへ
初とし

一 一 一 改及不法をいあとのあり法と大よ曲
人のこと一啓(そ世を長六人横三人と定め
うらやう一 細れそ京と一と筑紫のそそ要別

少く致くも間ふ念を是と曲ふの事と定する
法を以て能政道は又愚なり將ハ彼不
と爲る事道は是不迷ハ子道て古法と取爲ハ
家と破るを古法と破り新法と立利は立する
心根ハ其事よの扱ハ悪心御き者ハ此の事と
言ふりて其の事を見と曲人々の細工は
吾といふ事ハ是を世を六人三人と定する
曲人と言ふ事ハ我細く扱る事ハ世の教と
長七人横四人言てハ古人ハ空乳ハは扱る事

長一人横一人は其扱と知る事ハ是の事
其は何事の家不致てと間ふ念無そよめく
して曲人と知る事政道色ハ分別さてして
新義新法を用ひ終つて天下不背く家亡
者そ子細く其家の元祖天下國家と初て
而程の才智有くして之を世間の事ハ則道
懸ハ後来此爲不教の目とも念せし若者
して定する政道を我ながらの私に知ると
我心と立彼の欲深き輕薄有らざる事

先祖を祀りて天を捨つてはあは
れと返りて新法とて之を元祖の
若骨とて西都とて後世の大恩と知りて
家法を守り諸人とて分け構ふは天下の
忠信の道人そ何程上じきと能く有りて
家中のうとまれば長ふそむりて大恩人を能く
愛し又若くあると知り分けし令祖と集
て法人とて人のうとまれば禍の初を令祖
と祀りて人とて其の是家の長久を以て慈悲ハ

草木の根を人の祖は花實を根を以て其を
花と實と云ふ事と出づる事と考て只根と実
と云ふ根と実と云ふは古法と守り畜すて慈
悲と美の根を以て定ふあり

一
又上意不天とて法を以て貴爵の二つを貴ハ若く
貴より之を以て貴せされん若く人進むるは貴とハ
也と徳しむりて思を以てされん天下の悪人を
徳しむりて第一の徳と考て大小上下とて
兩方皆より外の法は其を以て右を以て

何れも此等てくつて改及とす。後日ヤ
一 毒忠ふらふことされし者いづく
ともさうの口のと即別切て捨てそと切口
やうて愈てそとそ急そ先と不切しそ重
そ口の毒後ふおそふ後そそ死するそ死
そそそ者そ叫喚して憂ひこころ先そ先
と早くそそそ天と治めそそ信ゆし
重は國天下の礼は基そ海はそそそ美の奢者
まれみそそそ世間人そそそそ

布しそそを最杯のそそ侍は中そ彼そ所
出入とせそそそそそそそそそそ
邪智とそそそそそそそそそそ
尤そそそそそそそそそそそそ
兎角にそそそそそそそそそそ
かそそそより大身小所とも心仲小そそ
極不思とも身体滅亡妻子眷屬まで迷惑
事とそそそみ望固と流一彼そそそ
そそそそと恨むとそそそそそそそ

まれば女は偽天下は流れて天下は偽
まれば古神

よき名を人からいひてあらぬし

これれ何をいひてあらぬ

と彼流るるべしこころいひてあらぬ諸
侍の儀を及ぶ及ぶ天下の諸大名を
一人一人威とすひ侍者ありて早く
是とすむき慈悲と万の元と定の普救と
可ひして侍天下と徳ふきし徳とす

一又三意ふ彼流るる多しこころて我使ふ者ふしふ
及ぶ諸大名と奢はき人又家来の者とも
一人ふ威とすむき奢はき軽蔑者とすむき
人は婦ひたり子細ゆきの人を天下に流る
の本より世に不徳一因有をいひて家光
れ上の言を思ひて目くふすむきそ家光は
それをも天下に流るるて世に尤國のまも世光
懐くまし御家光のよの徳一因有六正直
成を撰て用ひ天下に流るる一因有六慈悲の

政を憂ふは大事の心有り 依倚雅素不
能く聞け 兎角の事と 嗚呼して 天下の若
悪ハ家老とも 吟味させ 家老の普恵ハ
將軍自分吟味せしむり 其後之 又主人の普
恵ハ家老をも 吟味し 諫言とハ 定りて 百
道すれども 我 活身不 孰 我のまれし 財分ハ
法康云 廣忠云の代りの 老功の者ともも
心底不 思ひまゝ 口とつゝ ぬきとる 御古
方そ 悲して 主人 傍を 活きり 感言と 少成り

少て 悪人 我輩を 財を 一門 家老と 初め 其の
孰不 入る 事と 有り と 云ひ 諸侍と 自稱し
能侍ハ 押さへ 是 或も 此と して 不 公 法 人
を 名と 心底と 表違 彼 輕舊志ハ 自分 秀を
財を 始て 之 家ハ 必之 物を 彼 財 留不 二 有り 子
子との 上と 初め 尤 家老の 事ハ 見 概くに
聞 之 事 又 家老の 普恵ハ 旗本の 諸侍 吟味
是 我 家老 不 告 け 知 之 事 我の 道之 能 是 是
女 等 言 亦 稱 居 時 諸 人 何 事 也 云 云 ぬ

とのそ徳人小親友して是我聞き將軍此
所の上を初め汝等も所の上を昔の沙は
も聞及つて少威とも悪の沙は有る早
聞秘せよ自ら不潔りなきこと聞於不
くは尤何者か言ひしをそと今と云ふ
すん底小納く悪の言改まかりそ老の事
成も具ふずく入りしに再見ひくは
捨て太公望の辯ふ天下の自然はくは天下の平
と以て聞き天下の心を以て慮ふ事と云へり又

大孝小十の指きを所十自の見る所といへり
誠小尤の事之主人もさうし傍事とさ
うせともさうての諸人かさうさうたぬ者あり
所世との者えを意なくと誠といふとさうり
我り時に天下を治めんと持大将の常く世
の批判時の事なり秋まてふんと自改度と成
一これ信長六月二日討逆終末重八
四月半小く沙法せしと明智為て老中
小友さうり知せさうさうてしやそ夜家元

ともいふをききこり 能くも兼ていふ
事も夫道有り 隠れ程よく知り者そふ節
者は悪くいとめて己心ふくく人言知まじ
をと思ひ人をあむとて 汝能く心きひき
世の中 細くも守る能く 汝よく聞く 聞く
やうなりとも 汝よく 再ふく 事いふと 知む
何れの後少なき事と いひうりとも むきと
利よく 汝よく 知むと 汝よく 細くも守る
ふふあむく 天啓の昔けり 天啓より 人言れ

悪くはのせんとて 告げ知む 汝よく 思ひん
底小 畏むそ 戒のし 啓て 我ふ小 悪く 汝よく
父是と 打擲して 改めせんと するりとも
一 第一 八家法と いう 守る 下 家法と いう 八公家
武家 農工 高者 家々の 所 他ふ 守る 能く 法
是 武家 法と いう 又 守る 内 守る 農家の 法あり
是と いう 守る といふ 守る 守る 法と 守る 守る
能く 守る 守る 能く 守る 守る 守る 守る 守る
守る 守る 守る 守る 守る 守る 守る 守る 守る 守る

三ノリ又之價こころさる者れ子不能者生れ
少し何ぞ我家此實と云ふそ之家となひ
かろろそ之末子不能者由來て之戲小
可三つこころ者そ御也とも之者とも能き人そ
持てこれそ之家となても之るもろそ御書
之外我家此侍とも之子の價と男と初也
かつき事と計て所小も之能家来と持て
之志とせんとなすそ能人を持より外分利
なきこと不用の用なきれそ家はこゝろそ 扱

時利の用と六用事の内小を執事小を爲き能
人なき時を汝ボウこころ埋也持より者と云く
出用をとりそそ之をとり出されて主君小用
ひりり者そ我知ふ言慢せむと非ふんす
一人少く威と振を能事と仲間不譲り末代と
考へ飾り飾りと婚ひ諸人と云くそそ之を
事減の道と又一箇一郡の家元も世々傳る
我威と振少なき主人の大敵不忠の由極有り
これと將軍の竹千代方小権掣と後見に

備(大炊代謀言の旨とす) 伯存と守少月
らとよとの事尤も極れ彼之誠不雅乐
仁大炊の智伯存の雷壯三徳も有者と其技
術も竹千代ハ明將軍とる(まそを去て
あはれ背目家光ハ為て之人と吟呻) 我
身回衆れ者と有る(まそ) 竹千代亦亦
竹千代亦亦油と有る(まそ) 伯存あつて
まよりおしと不將軍の伯不守と有る(まそ) 思不
へ(まそ) 思(まそ) 小大根有る(まそ) 思(まそ) 下の根

不空め若(まそ) 言意悲(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)
事少(まそ) 亦(まそ) 伯存(まそ) 謀言(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)
子(まそ) 亦(まそ) 伯存(まそ) 謀言(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)
寸(まそ) 亦(まそ) 伯存(まそ) 謀言(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)
わ(まそ) 我(まそ) 伯存(まそ) 謀言(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)
こ(まそ) 亦(まそ) 伯存(まそ) 謀言(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)
子(まそ) 亦(まそ) 伯存(まそ) 謀言(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)
そ(まそ) 大根(まそ) 金儀(まそ) 餘(まそ) の大(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)
大(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ) 夢(まそ) 伯存(まそ) 思(まそ)

んふわらまらぬ喜抄中ふ

人のそむくところありてそ

わらわらとてあつるものありて

いふはらうたれんあかき

と詠み尤もそまきうて御愛ひをされ

返りし竹千代方、雅楽大炊伯耆三人小

任せし道玄院をされし我長崎の三所ふ人

付廻りて大賀の格、守りし非とあけ彼

と月星我有家老とと一應んつりて流ふ己

家老とより上見ぬ整の格舞とまんと思ひ

又殊小より三斎若衆者をれとして我家

と集りんと謀りぬきとも人、所本石ありて

人、少も微妙の使の心あふ依り後ふは宮部

と詠人、まを己の悪、唐大ふ城、あす内と

のありお尋して是非を、勝彩、内をせ

そ大將、もとの専要、不問、あつる事、諸人

の批判、そ子細、諸人の、身伴、少く大、河、も

忠信、少く整り、ま、あそ、諸人、ふとのと、云、せ

能くもさずき用ひの能き智恵をさすまは
威もつり少く諸人伏せむ臣も用ひあまそ
かまはしむ心少く敬ひ志すも臣を臣を主
の心不叶ひしるも人少くともまはハ臣臣不
あはれ

一 愚成者も子もものつきは縁を何事も我ん
の根も位もさし下とんぬぬふよりて思ふ
やうふもあもて必文子れ中流り家の禍と
まもあそ武田信虎と信信と義任と澄之よ

一寸先と知れ我思ひ入るるも一偏能と
心持人をむりく不使ふよりま家な事なり
人少くよりて家さるそ君と臣も百年をさ
先と考へしそ親類も威を三子とまひ
あはれ我も名はの者一兩人より威とまひ
信事とむひくはふまははし勝へハ金言名
白とるふまひ出るとそ百年の海は信重乱
まゝ家の滅亡をまをそ又一人少く威とまふ
者も何程縁縁よりとも心慮はうつらり又時

昔と見合ふれば家と奪ひ取らば下必そ子細に
滅の智急忠信者も有ん 主の威と自ら此
智急とと合せ依怙具復すく山也此道哉
仍ふ左家中の諸人志実不思ひ有る國中
是ふ志くふ者そ又何程もそハ意を度
てと心小邪忽有者ふん諸人思ひ有思あそ
大将とん志れ能く可圖否之出此家老の
邪惡より事ハ中々實不圖也一少くもそ海客
りも彼も立て後不實に圖りもそ將軍の事と

初の臣下諸士むゆの身の上此事もて世下の沙
汰と能く圖て將軍の批判惡友せそ急度謀
女の身の上あ〜沙汰あるも即列せ仍と改
他人の上悪友沙汰あるも縁とそ初そり小
思えせよ是將軍の為なり 我非^罪なきとそ諸
人の沙汰と前上より我慢邪智そ子細ハ諸人の
口より進ぬそ諸人の諍りと圖て我れひと
改よ是と天小恨をいふそ只末代と種也是
と擧ぐす志て一人二人より威と振ふありそい

ふ親の氣不入りたりとそ子の氣不入りたり者
多きそ父子の氣不入りハ掃之人五百餘代爲ふ
中武内大臣の外數代の大臣なり一世大臣と
人五十二代景行天皇より同十七代仁徳天皇
まで六代の朝ふつゝ二百五十年棟梁の臣
世武内ハ我朝史臣の始なり一筑紫の熊襲東
國の蝦夷と討日本と太平とあり一又三韓と
近治し又八幡大社の御印位と世大臣の切
なり又異國より日本と攻んとて數萬の人数

候し弟れとも武内大臣本州中あり是を近治
終へ年三百六十歳なり其後今の新羅
國高良大將神是なり上代我朝今末代の政
道なり一給へしと命一され我國餘一城
のまゝも阿と直所の城も用んせしそ三州一
國のまゝも成てハ直をを用んせしそ國東八州
のまゝも成て東海東北陸道北法氣と考へ
たりそ今又天下れまゝなりてハ日本國治
平しとる所徳異由れ事國はるそ今ハ異由

歴き言也も皆の前の覚悟不ありを能くも
世智よりよしの太平の時を礼と忘る家と云し
方と失力を異玉礼より何より本徳の是より
今川氏志の榮れ湯と知る世智成有利益
とてとて一寸先と云くは夏あつたれと老
の夢を考ゆそ末と考(奢と云る)され
石田の感不大逆と云くはまことありし天下
の事大小と云くは心お任せとされ用事あり
天下の愛と云る者も大小と云くは之の意と

をきけ或は身体滅しきせ邪欲深き者を崇
敬しこれ不能有りし立身は諸人諸
事の人々も千智自つて五十費をその
奉行不善用の宗ありし程不邪成者石
田は能く天下は執事とて譽を滅者と末と
考る者眉と云そのより或は何部主馬とい
者不秀吾れ浪子六七百枚程利潤ふせよと不
彼邪迷惑と思ひ思ひも吾れしに身上忍
滅しす。石田といふ一礼をそ浪子とありき

天下は福小納めを身は為分唐夜を操りて
之を行使とすなり 天を忘るる天災の
くも有る後を操本七徳の徳とすなり
果して大坂落城の時分千尋を友とて法人小
徳れ一番小松園を腹と切りし心者も徳倉
の安東大坂の部と抄せしそ忠義深く
志を富士を常の是徳格別そ大坂の者如理
まざるなり心徳を石田の楊とすハ主れ代と集
んととの思ひ一己の命より後世にて

己の心小頻ふ感と付しそ又今浪並浅の心は
天下玉家の主世理小治末せすとすふなり
又あつる徳義道をまふむと今浪と費を所ハ
切有る者と考定て財を普恵とす
財を切取むとすなりそ切とすそ徳と
すき者小楊小徳とすなりそあは体の者
そ又天の徳を神とすなり思ひて徳の者
そ又天の徳を徳とすなり思ひて徳の者
時を能く思ふなり 日如と攻めし武勇と

ふひたせく返居そく天下の大寶之既
日知より異玉と責つ道と又異玉より日知と
責まゝ思ふ思ふなり又家の大寶諸
侍武道之志と前義実忠信深く
追及追及の風俗なりと國家は業えり
し前家より家は大寶之又汝の心は
埋道はる方と心は不取之信也と諸君不
只自れは傷を絶ると思ふは
なまじり小徳免一言も能く考へし汝り

一言の善惡を將軍の善惡と我尼控てさる
者不奢者あり我色と異見し如き道とも聞
くは世を多分言方自分威を思ふ
不使すもなり汝必傷心也とありてあり
大石忠とんは乃と門下け諸人の親愛して
忠信とそせ又旗中は善惡は天下の治乱不
かそそ政を正し時を天下に武士教ひ尊
彰成時に忽敵とあり古にれは天道の
是之扱又大寶とそそ傷り者そそ早し亡

包しとて大木の枝四角のつぎ片（りりり）
何ぞそ木沈舟不業ゆもそ一方そりの枝常え
つり金もあつても此木枝不むれ折是こと
尚しとて玉也と一人そ感とそ方以常の時ハ
そ家必感止はるそそ木的一方枝と切て本
木とてそと海とそ奢とそ去て天下と海の
陸（と）し旗本の諸大名も不親奢るハ
隠居を長子傷も二男三男と即一家の内に
之家迄も益量の者不取銭つせよ是大道

順不理なり又玉持大名の家光出立の者傷も
流して一人二人少て感とありそ是又主人不内
想して再びとてし主人異儀不及び主人
景不改易せよとそ異儀不及び忽ち討面し
又何の罪とそ多不裁勢ふまうせ侍とそし
我一門家臣等に何とそ事向て道罪ある
者我亡し誤りあると討何夫及不背そ天
罰ありそ何の罪とそ我家不男子そそ
女子不縁とむまひてそ家とそ是則天中哉

法を後之に子細とて之の處を續く侍
しとて功なり又愚なりとて之を先祖に天下へ
忠の有家とんて先祖の忠に對して忠家と
て之の處を及なり物色を彼之魂遊鬼も懐け
かゝるを我と人を貴とくすも忠を之と
第一主君のよめ具け子孫のよめ之を子孫と
憐に之を先祖の勲功と感て之を成り又忠信
とて世に平家への忠信は事なりとて之
天下への忠信なり我と天下へ忠信の者なり

所ふ今天下の執柄を天下より脱け脱け下政
道とて外路ふ愛す。何ぞ天下より執柄を忽
可と館を天下の治礼に只將軍の寸心の内ふ
ありを世に我能く守り終へて天下に
天下の天下あり國を由れ國あり也此の處
なれとて音の事と思ひ新居を立て家成
新ぬすり事なり也吾國法成も我の立
す家法を思ひ終へて之を我も
昔時と考へ能く法原公唐忠公の在り也

光圀の武士は諫言致して之を改法之古き家
と云ふ事あるの元祖の位重と云へり少て
守り舊功の位と云ふ事と家古きと云て
之を家代何程久愛傳りたりとも此位と云
舊臣守るとき時は是れ新友家此無友とのありた
と云ふ字宗の刀と云ふ入道の作りたる刀あり
能くしる事ありやう小春の時に字宗とて此
あり能く此刀の持ちり礼又、すきなりと云
書又と礼ありし又礼と書ふ事とし事のこれ

と一代ふふやま、事とて世に字宗の位正字
ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云
ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云
らぬ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云
事と云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云
流しと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云
へ事と云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云
湯智と云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云
法不事と云ふ事ありしと云ふ事ありしと云ふ事ありしと云

一そそ家と治より孝女の弟なりそ家
と強きそそ先祖の家法を守りそそ不孝の
事極之そ罪過也そそそそ家と破り
そそそそを助て明君良將そそそそ人
のそそ能れ能るとそそ圓ひてそそ政后の國
天下と治そそ頼朝奥州の泰衡と討そその
跡の位をとせそそそそそ泰衡位をの
みそそ書て所そそそそそそそそ奥州忽ち治
よりそそそ言礼奥州そそ今そそそそそあり

我も見そそりしそ右のゆそ書て彰朝の判也
あそそ

一 近もそそ女貴六諸人の夫そそれゆるそそ不孝能と
有目也そそ又家老の中ひのそそかそそそそそ本
曾山の檜本すり今そそ火とそそみおそそ大山と
焼そそり如そそ不威とそそて必まれおとそそお
そそ家と考そそ女お威とそそそそそそそ諸人そ
むのそそそ忠信とそそそそそそそそそそそ
の威とそそそ將軍のそそ女お治敵そ類そそ

威と好む者ハ主と云ふ事ナリ候事ト云々
者之細川武元入彦頼之ヲ以テ臨之備用忠
信ト武法ト之能知也
武法ハ仁義ノ
武藝ト非也

智徳篇卷之一歟

